

蓮の花

前田 聽瑞

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

何かは露を玉ごあざむく——僧正遍昭

夏が来る。蓮を想ふ。

山は開かれ、海は招く。灼熱の太陽に若人は躍る。夏の山は朗かな韻律で神秘の歌をうたふ。砂の彼方に光る海はわれく強い魅力を持つ。又盛夏の頃、山の麓、緑の森に、風動く海樓に友を語り、會心の書を披く心境も亦格別である。

けれども、恵まれた暑中休暇を心ゆくまゝに書齋で送る氣持も亦棄てがたい。夏の書齋は人間禮儀の要件たるべき衣服を棄て去つても、誰もが咎め立てをしない許りでなく、爽かな涼しい手を以て、薄い肌膚に快擦を與へる。兼好法師の云ひ草ではないが、ありたきものは池には蓮である。わが前庭の池には白蓮が今を盛りと咲き誇つてゐる。烈日かんくし照り渡つて、なべての草木が打萎れてゐる時でも、この花ばかりは獨り涼しい笑の眉を開いて私を遇してくれる。昨今は日毎に三四輪乃至八九輪の優しい花を見せてくれる。暑い夏を毎日書齋で送つてゐる私にまつては、蓮はまことに無限の好意をよせてくれる善友である。花の中では蓮の花は私の最も好きな花の一つである。

私は急に蓮について何かを書いてみたくなつた。こも角「筆をば物書かる」といつたやうなごく軽いものを、蓮によせて書いてみることにする。何にかの役に立たうかも知れない。立たないかも知れない。立たなくてもいい。私はか

うしたものを一つの契機として後の日に何か纏つたものゝ生れ出ることをかすかに希つてはゐる。

蓮は印度人から常に愛翫された花であつた。蓮は遠い／＼大昔から印度到る處で、一般から持てはやされてゐる。吠陀の神話の中にも蓮はよく出てくる。後世の梵詩人は蓮の花をば美の象徴として、いつも愛人の美しさに譬へてゐる。第七世紀前半の印度詩人バルトリハリ (Bhartṛhari) はその著「戀の世紀」の中で、「何人も蓮のやうな眼を有つてゐる乙女たちの魅力に抗することは出来ない。博學の人々でも出来ない。戀愛を排拒せんばかりの彼等が言辭は單なるあたごに過ぎない。」と書いてゐる。加之、蓮の花は各時代の印度美術並にすべての宗教の中に顯著なる裝飾的要素として重要な役目を果してゐる。佛教美術は勿論、耆那教及び印度教美術に於ても蓮華の裝飾紋様はかなり目立つてゐる。佛教の東漸と共に、この蓮華の美術的要素としての傳統は、遠くわが日本にまで擴がり用ひられた。

蓮は印度では優曇羅華 (Utpala) 即ち青蓮、盞曇摩華 (Padma) 即ち紅蓮、拘物頭華 (Kumuda) 即ち赤蓮或は黃蓮、分陀利華 (Pundarikā) 即ち白蓮の四種を算してゐるが、普通の蓮華を云ふ場合はブンダリーカ即ち白蓮を稱してゐる。これ等はその花瓣の色彩に別異があると共にその形狀の上にも多少の違いがある。

蓮は亞細亞、阿弗利加、濠太刺利その他到る處にある。が、本場はやはり印度で、隨分大きなものがあるやうである。ダス (Derenda N. Das) 氏の『印度生活の素描』の中には、大きなものになるこゝ、直徑四吋から十吋に及ぶと書いてゐる。しかし、私は印度の旅に於て、蓮花の大きいのが無いのに聊か意外を感じた。『阿彌陀經』にも「池の中に蓮花あり、大きな車輪の如し」といつたやうな形容があるから、すばらしい大きなものがあるこゝゝ期待してゐるが、そんなのは見たことがない。まづ日本で見るのこゝあまり違ひはない。

印度では直接蓮華そのものを禮拜することは無いが、昔から詩歌に詠まれ、繪畫彫刻の上にも好んで用ひられ、花の中の花として最も神聖なものと考えられてゐる。

佛教に於て尊信崇敬する佛菩薩等の諸尊は色々の物を持つてゐられる。觀音菩薩は常に蓮華を手にしてゐられるので蓮華手 (Padmapāṇi) の別稱がある。印度では蓮華を手にせる彌勒 (Maitreya) 菩薩像を屢々見受ける。不空羅索觀音はその左の一手に開敷蓮華を持ち、虚空藏菩薩もその左手には福德の開敷蓮華を持ち、摩利支天も手に蓮華を執るなど、蓮華は佛菩薩の持物の中の随一である。

又毘盧舍那佛の淨土を蓮華藏世界といふ。蓮華の瓣々相重なれる中に含まれたる清淨なる世界といふことを意味する。天親菩薩の『淨土論』にはこの蓮華藏世界といふ語を極樂世界の異名として用ひてある。又妙法を蓮華に譬へた妙法蓮華經 (Saddharma puṣṭaṅga sūtra) の存するところは周知のことである。殊に密教では慈悲をば「蓮華部」(部母—白衣觀音) と解し又衆生本有の淨菩提心清淨の理をば蓮華部に配してゐる。

蓮華を宗教的現象に關係づけることは、必ずしも佛教に限られてゐない。

スカンダ・プラーナ (Skanda purāṇa) の説によるに、太古、世界を擧げて水に覆はれ、毗紐敎 (Viṣṇu) は千頭蛇の胸に倚つて眠を食つてゐた時、その臍から一莖の蓮が生じ、速かにその莖が伸びて、水の表面に達し、花開いてその中にブラフマーン (Brahman) 即ち梵天が生まれたことになつてゐる。又好蓮の女神ラクシュミー (Lakṣmī) 即ち吉祥天は手に蓮の華を携へて、海中より出現したと云はれてゐる。かくの如く吉祥天は蓮華と特殊な關係にあるために、パドマ (Padma 蓮華) とも呼ばれ、美の典型と考へられてゐるが、わが國では開敷蓮華の持物は寧ろ異像で、一般的持物は寶珠である。毗紐敎の神もその第四手には蓮華の莖を携へてゐる。富蘭那 (Upaniṣad) 文學にあつてはヒマラヤ山が蓮華世

界の中心に擬せられ、蓮華の果皮はカイラーサ(Kailāsa)山中の梵天の聖都である。又印度教では紅蓮は梵天(Brahman)を、白蓮は濕縛(Siva)を、青蓮は毗紐敎(Vishnu)を象徵するものとしてゐる。(ハヴェル氏・印度美術に於けるヒマヤ参照)又埃及人に豊饒を與ふるナイル河の神化オシリス(Osiris)も亦蓮華にて表徴せられる。

又蓮華が裝飾紋様として用ひられた佛教的な遺構は、印度に於ては夙に阿育王時代のものに見出される。サーンチー(Sanchi)東門の左側支柱の正面には、蓮華の上に片足を置いた耶舍女神(Yakshini)の彫像が見られる。バルフート(Bharhut)マニラー(Mahura)アマラーバチー(Amaravati)など、それ以後の遺構の中にも蓮華は或はナーガ(Naga蛇)に支へられ、或は蓮華座として現はされてゐる。佛菩薩の臺座として蓮華を用ひることは佛教のみならず、婆羅門敎の方でも之を用ひる。但しその蓮華の形については八葉蓮、千葉蓮など、その形式は必ずしも一定せず、その色合も青蓮、白蓮、金蓮などがあつて又同一様ではない。

蓮華は又印度の詩聖が最も愛好したテーマであつた。眉目秀麗の男女はこの花に比較せられた。夕に閉ぢて蜜蜂を囚ぢ込めるこの蓮華は常に特別隱喩の題材とされた。泥より出で、しかも染まざる清淨純潔の象徴とされた。蓮が芽を出しては花を開き、やがて又萎んでゆく蓮池の榮枯盛衰、諸行無常の象りとされた。心臓と胸は蓮の形で表はされ、宇宙は時としては一大蓮華だと考へられた。水上に浮ぶ美しい蓮華は火宅の印度では一種の樂土を想像せしめた。

「筆さらば物書かる。蓮華に關聯した話としては、蓮華藏世界の話、蓮華會の話、白蓮社の話、蓮社號の話、それから周茂叔の愛蓮説の話など書き出せば際限がない。

日落ちて、前庭暗きころ、蓮花新に妖艶の態を盡す。夏は夜は蚊軍に攻められて物を書くに便でない。餘は他日を期して姑らく茲に筆を擱く。